

「る・れ」の識別 確認テスト（古典文法） 解答・解説

■ 解答・解説

問1 受身・尊敬・自発・可能を表す助動詞「る」の終止形。／根拠＝直前が「降ら」とア段の音（四段動詞「降る」の未然形）であるため。ここでは雨に「降られる」という受身。

問2 尊敬。主語が「帝」という高貴な人物で、その動作（笛を吹く）を敬っているため。「お吹きになる」の意。

問3 意味＝自発。「(自然と) 思い出されてくる」の意。直前が「出で(ら)」とア段（下二段動詞「出づ」の未然形）で、心情に関わる動詞に付くため自発。／現代語訳＝「昔のことが自然と思い出される」。

問4 可能。「(この弓なら自分にも) 引くことができる」の意。下に推量の「べし」を伴い、打消を伴わずに能力を表す文脈であるため可能と判断する。

問5 完了（存続）の助動詞「り」の連体形「る」。／根拠＝直前の「れ」がエ段の音（四段動詞「うつる」の已然形）であるため。「月の影が映っている(のを)」と存続の意。

問6 完了・存続の助動詞「り」の連体形。直前「咲け」がエ段（四段「咲く」の已然形）。／現代語訳＝「咲いている梅」。

問7 受身。「(道を歩む人が) 犬にほえられる」の意。直前が「ほえ(ら)」とア段（下二段「ほゆ」の未然形）で、「犬に」という動作主が示されるため受身。

問8 尊敬。主語が「大臣」という高貴な人物で、「参る」という動作を敬っているため。「(内裏へ) 参上なさる」の意。

問9 自発。「ふるさとの夢ばかりが自然と見られる」の意。心情・知覚に関わる「見る」に付き、動作主を示さないため自発。

問10 可能。「これくらいの坂は馬でも越えることができる」の意。能力・可能を表す文脈であるため。

問11 完了・存続の助動詞「り」の連体形「る」。／根拠＝直前「積もれ」がエ段の音（四段「積もる」の已然形）であるため。「積もっている雪」と存続。

問12 助動詞「る」の連用形「れ」。直前「散ら」がア段（四段「散る」の未然形）。下に接続助詞「て」が付くため連用形。「(嵐に) 散らされて」と受身。

問13 助動詞「る」の未然形「れ」。下に打消「ず」が付くため未然形。／意味＝可能（打消を伴い「まだ咲くことができない」＝不可能の意）。

問14 完了・存続の助動詞「り」の已然形「れ」。「祈れ」がエ段（四段「祈る」の已然形）＋「り」で、下に「ば」が付き「祈っているので」と確定条件を作る。

問15 助動詞「る」の連用形「れ」。下に過去「けり」が付くため連用形。／意味＝受身（「鳥の声に目を覚まさせられた＝目を覚まされた」）。直前「覚まさ」はア段（四段「覚ます」の未然形）。

問16 動詞の活用語尾。「流るる」は下二段動詞「流る」の連体形で、「るる」全体が活用語尾であり助動詞ではない。／もとの動詞の終止形＝「流る」。

問17 ⑤・⑥・⑪。いずれも直前がエ段の音で、完了・存続「り」の連体形「る」。

問18 ①・⑦・⑫・⑮。いずれも動作主（「雨に」「犬に」「あらしに」「鳥のねに」）が示され、受身の助動詞「る」。

問19 助動詞「る・らる」は未然形（ア段の音）に接続し、完了「り」はサ変の未然形・四段の已然形（エ段の音）に接続するため、傍線部の直前がア段かエ段かを見れば両者を区別できるから。

問20 意味＝尊敬。②は主語が「帝」、⑧は主語が「大臣」と、いずれも高貴な人物の動作であり、受身・自発・可能と解する文脈（動作主や心情、能力）がないため、敬意を表す尊敬と判断できる。
